

# 名作映画鑑賞会

戦後の混乱を乗り越え、復興の時を迎えた日本に生きる様々な家族や夫婦の姿を描いた作品をご紹介します。

12月13日(月) 9:10開場 9:30上映開始

亀山市文化会館大ホール 9月1日(水)前売開始

入場料(全自由席) 通し券 1,000円(税込) 2本以上3本まで好きな映画をご覧になれます。  
一回券 500円(税込) 上映作品3本中、いずれか1本をご覧になれます。

## ①名もなく貧しく美しく

[1961年 東京映画] (白黒)

9:30~11:39 監督/松山善三

出演/高峰秀子、小林桂樹、原泉、草笛光子 他



## ②煙突の見える場所

[1953年 新東宝=スタジオ8プロ] (白黒)

12:30~14:18 監督/五所平之助

出演/田中絹代、上原謙、高峰秀子、芥川比呂志 他



## ③この広い空のどこかに

[1954年 松竹] (白黒)

14:35~16:24 監督/小林正樹

出演/佐田啓二、久我美子、高峰秀子、石浜朗 他



### チケット前売所

亀山市文化会館、亀山エコー案内所、青少年研修センター、  
(一社)亀山市観光協会、フジヤ、鈴鹿ハンター、  
(公財)鈴鹿市文化振興事業団、みどり楽器

# 解 説

## 名もなく貧しく美しく

[1961年 東京映画] (白黒/シネマスコープ/モノラル/129分)

木下恵介監督の下でシナリオの修行を積み、助監督を務めた松山善三の第一回監督作品である。聾唖学校の同窓会で出会い、結ばれた道夫と秋子は、貧しいながらも身を寄せあい、懸命に生きている。やがて夫婦には子どもが生まれ、暮らしも落ち着きかけたが、秋子の素行の悪い弟に、金の問題で繰り返し悩まされる。絶望した秋子を電車の窓ガラス越しに道夫が励ます姿は、手話によって二人の絆が語られる美しい場面であり、印象深い。本作は、松山が自らの監督デビュー作として準備してきたもので、「靴磨きの聾唖者夫婦」という設定に松竹は難色を示したが、東宝のプロデューサー藤本真澄の判断で映画化が実現した。同年の毎日映画コンクール、ブルーリボン賞の脚本賞を受賞するなど高い評価を受け、興行的にも成功した。「高峰秀子の夫」というイメージがあった松山は、本作によって一躍映画監督として確固たる地位を築いた。「キネマ旬報」ベストテン第5位。

## 煙突の見える場所

[1953年 新東宝=スタジオ8プロ] (白黒/スタンダード/モノラル/108分)

東京・千住にある、見る場所によっては四本にも一本にも見えるという巨大な「お化け煙突」。この界隈を舞台に、戦後の日本を生きる庶民の悲喜こもごもを描き出した五所平之助監督の代表作。足袋問屋に勤める実直な中年男・緒方隆吉は、戦災未亡人であった妻弘子とつつましく暮らしている。生活の足しにと二階を税務署員の久保健三と、街頭広告のアナウンス嬢、東仙子に間貸しているが、そこに見も知らぬ赤ん坊が置去りにされていたことから一騒動がもちあがる。実存主義的な作風で知られる椎名麟三の短編「無邪気な人々」を中心に、黒澤明作品で知られる小国英雄が脚本を書き、五所監督自らが主宰する独立プロダクションで製作した「不思議な笑い」を醸し出す一篇となった。「キネマ旬報」ベストテン第4位。

## この広い空のどこかに

[1954年 松竹] (白黒/スタンダード/モノラル/109分)

どこにでもある町の酒屋。働き者の若主人と嫁いできたばかりのその妻。一緒に暮らすのは若主人にとって亡くなった父の後妻である義理の母と、その子供である妹と弟。気がかりは戦争で足を悪くして家に引きこもりがちな妹。そんな平凡な家族でおこるささやかな誤解と、やがて来る和解。人物の感情の流れを細やかに、かつ鮮やかにとらえたホーム・ドラマの名作。木下恵介監督の門下として前々年に監督デビューし、その後『人間の条件』(1959~61)や『怪談』(1964)などの大作により、世界的巨匠となった小林正樹監督による第四作目である。